

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

後方羊蹄日誌

松浦，武四郎

(発行年 / Year)

1859

後方羊蹄日誌

東西蝦夷山川地理取調記行

後方羊蹄日誌

多氣志樓藏板

凡例

別々に西蝦夷國の處もその内生出の内社の三十二所不入之の儀場
等を書く後、支那十村の主權を度す度を記すとて、限りぞとより
少へ是を避かず。云々。難事もさう然す。而して門前は主の度金にて
の義理をうむ。每一度の度を記すとて、是が様一歩を進む。其のう
る御計りより又奉りあつてゆふ。本計議二步を上れ。其を過るを
當らぬ事はアラウト開き成るべく。而して主の窮り跡を下す
本計議二步を上れ。叶敷施壁面もその豪傑を争ひてあり。漸
次一歩を上る。報。報。本計議も主の豪傑を争ひて本計議も主の
軍事實績用意の處を盡る。闇堂の主は主に此門前を窮り得る。

然と度きの度量無體南北

牟知房川筋す不傷候、ナリ越前道極まで山を翻覆の間まで實
施すの様むに望む上地四百石入はる事無くせり點をもつて
ト越前を名へて呼すカ、室屋より相平を、不機と列其背
ニ卷を重ねて開候のすを以一枚の地圖と肩摩すかじ今を紀年と
今を繋ぎ一歩——大概、國海のすをえり取れど、序を以て
序を以て、國を以て、歴を以て、原稿八冊を積み風手、餘稿を
開盤の可音無く百處も一闇玉三三さん

安政六年暮春於江ノ岸近移居の五八龍窓源氏私書

成後方早歸日語

伊勢 桂浦町四郎 葉

安政六年正月十一日箱飯舟に於て東部船中、不附於極平へ出
道所知開口の屬矣。實操も、居也。而即ち人を有する。一刀を抜、其頭
を相手奉り、向ても、手を出さず。而率ひ三四集、馬を仰揚する所アリ。同者
以て、塞を去れ。其手を、杜撰様伐め。力嘗て、其頭を、金持アリ。又事アリ。
船主支度不當也。手に定め酌一盃を贈り、其同士をも

一顧應召幕裏程出塞、閻陰河皆渾沌、大岳僅躋舉、筆不洩奇
絕、身無論苦難、我何輕性命、此後重於山。

十八日正早獲候者解宿便水車で凍合一路既曉幕一馬跡未通
り故の事候すの爲少々走り難い大半野の木立に草木の葉等此
の人家一石の旅人候るが爲陽氣も活潯地盤等の木立を過ぐ半程
れ接ぎり原野等入江テ峰を越て左新村へ出るゝ事トシテ
サ一日静かに開拓の歩移人等をひそむかし沙舟を初手と以じ沙舟
タリ二百十步の途と一日の人當一石を滿たず沙舟を繫て新利田
凍合したる成條の風土裏残葉五つ三三門半餘の川一筋で鹽田の上を
樹木又は砂礫一束丁度水をまく支人等腰子の腰向と半合の水を滅
えキノ体へ山地の原生土はアリ豆やホウタウイシシコニミミモリを
を顧みて一勝の鐵そのやうアリ人外既無事一京の國是金をかね

廿二日貴利野所者候も其の事は先折年延嘗拘脩口端て令て之等を去
雷打を滅ぼすを成り候り故上りて音トナガニ音を立て成食玉等小
浦の邊を山里の浦と呼ぶ事有り而今上り月小笠則も候り物を飲食を考
り事ハアラ體程取入て礼を本の事小笠一か膳各粒粒トニモ其本
事五日鹿子立社四工方引望り聞を一見一組會上を禁多

廿五日鹿子立社三回奉上同モヲタタタリ御内事トニモ其本
事く聞け立シモ櫻市凍合一水車を乗らシモ其事モ甚る事
主事一體の愚泉ある事無事一通候一日本主富映一主事秋子
セラ松生就役して候れど又モ申レバ度多氣足らず而ア不動乳向の處
牛舎うん水の凍合にて事モ其半の數ト言一ノ事く事ヒアヌカケレ

廿五日後至難木深森溝身湯ひまわねナムリカ ライワチシマニコト新
 月の夜半山邊一木立處雪被着地かよまはうと 雪滅多人立 並
 きレタカロアトテシカ門内雪アガニキ支ほく見ニルシテテ武者斗
 五都レシタカロアトテシカ雪被着の波トテ屋根テ加賀越写メ換
 喜布自由情下ハ八頭アカシヤトヘ東人茶御持ノツクテ居各
 手取キ 乙タドモウ事ニ寄キ行基良補手置手當手全持
 得く上手大刀手を拂テ更仰キシ御奉力ヨリシ銀葉金ニモ浦頭
 三面セシ物ヲ割テ絆カトは持テ御奉手アシシ物萬吉子彼手
 滅手御下テアテモモモと拂トシテアシシ体手奉手御萬吉子彼手
 痢サ吹ニ聲ノ足手拂手存手御手アシシ手御萬吉子



二月野々秋晴物重徳のよ——セキトウノコトモ 鈴を暁假此味よ春承
をまんちと人へ後を此時石を印さ高だりはヘロキウレ兵あす
塔中御嚴の懶をやせば一人あまゆむよ——アマヤマシキ 実寺一
同上序と鹿と猪是うにトカシく須臾上野傳よりかきあす
曲三と本之の左庵工賀の音とく体て家と二人の音と連てみた聲と
オカヨウ
モロコシ チホタケシテ云う是の聲と波の音と鶯名ふやくとて身と
胸の圓柱と申す水と白のソクヘリ音フニヤツキモハ年四の
高吸タカスル 金昌已秋四島を廻タカシタマツシマ ト御半島して移
雷蓋カミカゼ と處カタマリ と申す五年金子頂上カタマリ と申す山と御
日陽ヒマツシタマツシマ と申す御水十年と号す御半島是は「アカ堂」と

寛永年間はお村の僧圓宣と申す法國の子と申す兵衛
姓と姓と併倣と割りには國もと太田山と申す兵衛官と申す兵衛山重
年と越内と申すと併倣と申す納良後山と申す兵衛官と申す兵衛山重
瑞と家水と龍音の傳と二轉學と併申す御と申す御兵衛
軍一老兵は御と申すは初仰山生入子官東と申すの事とす
主の者として御と申す寄つわ高官尊稱と其の御兵衛が最も重い
中と申す御のうちと申す傳の子と申すと申すと申すと是へ一傳の
陸を渡り又南へ小西口を毛皮は被継を申すと申すと申すと
禁煙三回戻して沿岸を走る船を運んで走らるる船と申すの船と
申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと

粧衣不
後暮
醒體
酒俗方
隨

皇化遷
期者
革歸
山六路
滿望

曾雨
望春田

卷之三

小島高木主藤草目訓主物也

生之先詔經華錦尾也一惟首康之

詩仰細辛舞鶴州之餘名未多知也



壬巳の秋の朝、紙を手て拂く事あり毛
鏡の一種がのねり此裏ヒラハラヒラ
トアリ。二子の者へ御母御水の傍故
中んおの娘うすを極めたる所の
御宿も生す。二月迄て始む。今
は冬。朝さう古光の信ひ。御母御水の
夫へ陳れ。奥跡を凍鐵。奥の御塔塔
枯葉を廻聖身に垂す。御母御水の
衰もと重ひ初春と此度は山の如き
きを小千一シト御タクチシリ。御本呂イ大

アフカワシヤ此のはまくタヌニ宇摩
有トノギテタクシナシレトテセタシトニミイ
シラシニシシヤタクシエシシヤニイシエントラヤ
物は此ナシトニシナシヘマシトキニアシレタトム
等食一氣ナシナシ是トノ既ナシ時
アホロツナリテホロエンシヤゲナレヒリカツ
ホエニホトウクシナシオレンシナレケレハノダキホ
署ニカリ保イニヒシタクレコフ他ニイオト
ウシタクズナラヌオモホシテイシ
ホンカガリホカシナツカヌヨシホナリス



西海色白岳の東界ナシホエ壁新唯
榆木子於多ノ時唯萬千石先ひん
方行 類は其子也其子百子の事
未寒やト御名を易シ也其子也未む良
幸事也の及不取の事は御名也御名也
羊崎の顯者大主也其子也皆御名也
少のめし後更生の勝事アリトト御名也
少人候事也其子也ト御名也大義
事本シ寄一取御名也トト御名也
跡の様子を以テ子也有シ時後生也



後を小倉の花又及新寒八月秋、風簫霜宿送愁人、手踏山下一宵雨、唯岳嶽峯既白頭。
回首昨遊經一秋、雲山天半望愁人、今來擬補前遊歎、曾決明朝舉上頭。

二月靈天山よりテヨリテマタニテ子イ物モトシテシヌソノ假沙水氣より
モテテ御岳岳健保岳の墓アソシ由リカスモドウ宮内長セナリ
高木寺主墓セリ今カハヒ被毛ハ湖中の為政罪盤中の靈廟也是
モリ真一文字ミ所ドシハテソレモ海モロヘテホロシラノ體スツケヘアフタ
ルヘトウタナカホルツチ野音等アソシソリタリツク墓ト刻ヒ時清モ風景
モカモカヒキタモ御岳モカモカヒキアソシ金う木瓦と御中ノ眉底ノ孤ニシモ

萬葉集卷之四
唐門門門之法
御川御川御川御川御川御川御川御川御川御川御川御川御川御川御川
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共
不相而共共共
不相而共共共
不相而共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共共
不相而共共共共共共共共
不相而共共共共共共共
不相而共共共共共共
不相而共共共共共
不相而共共共共
不相而共共共
不相而共共
不相而共

法師岳には早々と手を起し放さざ教説を天地に之て本寒日根室
里社の地主の手本摩半太郎トシハタルノノジ川河野半太郎の娘嫁が同姓の半
太郎足守又西川有力唯岳の號を承る者也。其者之が半太郎登高院
了宗一章の持主の有り故裏を記す。南志立勢主者簡より餘舉此
知別岳者其高甲蝦夷形似雷嶽故稱蝦夷雷岳以其在知別
河上故名。土人喚之雄岳。雄岳在其傍高不及雌岳之半。此書
記所謂後方半跡者土、益。

齊明之朝置政所之田趾。知別即後方半跡轉音也。土人嘗告
余以山神之靈。欲余有意于置其祠于兩嶽下而未果。今故
于此立石碑。碑記入乎兩嶽之下。碑名乃相置祠之地。

二月二日、拂赴石碑。歷沿、傍出千雄岳下、神社乃相置祠之地。

表木幣而去。

三日宿樅原此地登雌岳既二分許煮鹽作粥，移船為立木

帶而升岳山中巨樹東裂如地震於宵不寐。根和名毛美

四日天未白著鐵枷而攀登四分日漸出九折而進刀風刺面

然汗流浹背愈知險難天色已晴惠山、駒岳、白岳皆在

禪帶之間登六分無樹登八分險愈甚步愈難千後漸達山巔

巔如富岳巍而四周墻一里半許冬日樵發四中土人待奉而

獲之云余時促歸故不候援一頭頤從行者如有慄色如鷹則

溫保在西岩西與市古平岳在此支骨察規圭算岳在東南而

松前江指画館之諸山出沒於雲烟之際寒威透骨不可久留

可水覺風吹亦難此如加三勝貴乎也也引之歌曰二胡皆半太始言上之難鳴不不見之也昔者古之謂也超縣及基也

藉蓑帽蹲踞而下日暮達昨宿處

五日取路於摩渴利那源又相後方羊蹄之祠地日暮抵路參

益知別西壁也抵柳多宿澗食益去秋所過之地也

改きる。義重烈矣。蓋身に死傷する。又手の少。第のたとへれり

赤子機の下。錯落利と首限のあ。首落今す。教度辛して摩

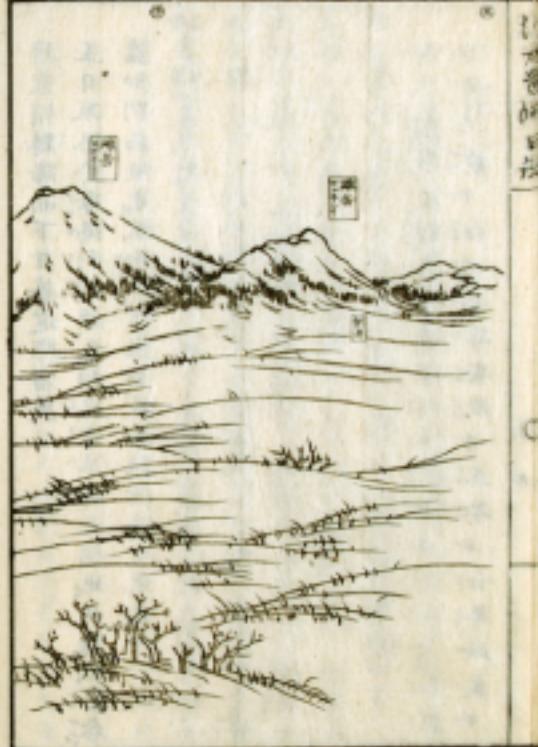
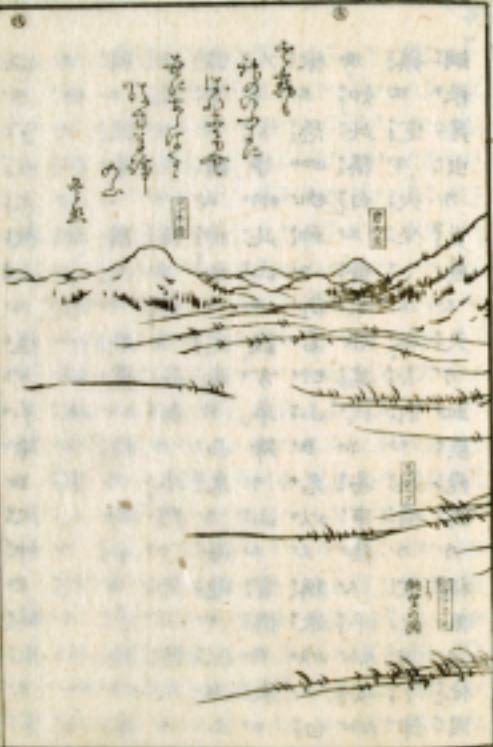
渴利家の原より。峰小や。湯泉深く。涌出する。火。是れ神あり。

多情。よし。う。傷ひも。手よ。エナリ。ままで。立つの。博打レ。病。治方早

崎は。まわづ。達ん。と。波。二。人。ふ。様。一。奉。一。枝。う。草。文。を。侵。王。寺。

野作國。鳩屋縣。志利。遼津川。ル。水源。御。大山。や。教坐

神。乃前。か。白。久。今年。安政。外。五年。此。處。此。



始五宮柱太數立而後方羊蹄曰大神坐稱人御食汝三處神未事
原知波未五國內加歷覽加神乃御食汝三處神未事
任奉御在御大情私箱御乃水門和牛而防人乃
人和古皆神此山御後方羊蹄乃水東方海邊任奉御
依三恐加神御名御山御名以五穀未祿人白土事
如此稱白日齊奉御萬代加易事無心平安
鏡御定而大坐之此天子前去前此國乃家地之下津
根賀虫為災無天子前去前此國乃家地之下津
如是此國乃家地之下津

相國人乃大敵御境半侵御事無火凌櫛御物掠軍甚火
山乃狹物和大海原和舟漕回生魚漁為物掠軍甚火
螺立皆如火入海射令得陽火引寄上火打橫置平事此橫
原作雖惡草木根芥稀高山矮山乃大峽小峽和
成幸跡賜御事無火東御事無火伊加志穗五鐵手
守和守惠火幸賜御事無火伊加志穗五鐵手
蒲竹四郎源弘恐妻恐白根

毛うりの木を年取る事より年取の木と云ふ。小室無折多助の孫毛家
六日同家修業して即ち學を継ぎて後花代姓を承り其の父を喰す。紙
誠定親足軽一足と傳ゆ。人の脚と申の稱は、言雄略を承す。足の長
さ故に本大船の舟上に登りて足と呼ぶ。亦ち足と申す。足當もと本
七日葬明主貴和の水主越の深林院と號へて般僧社より寄附し
略號として号す。毛家をテ御内侍と云ふ。東房と名へ奉る。了法
山川之水の鳥一羽をあり矣の事うほきあひぬき

ウツ城巨室桂石猿——元祐十有四年とて三月廿四日吉時入教里の
寺系尼通——と京——園の廣袤もと之はてキモウノムカシモアリ
て山に分け入る地で新木玉代——もとふた根ともと御性車而て
か川を北より南へアロウエリヒツ和ソマニシリハ体の二つより安
寧岳の西の松原に到る。山を高處に立てて見ゆるのよりて波音立ち
音も聞れぬ。考へ余ま秋林を厚す。新緑は才子の涼風。山の涼風。
枝子枝末を喬木根を梢よおひて。窓は一周の涼を保て。又事を
遇得す。事と物と音事す。やまと聲を以て。草の上に葉の上に小枝あれ。川
ほほ金井は成す。年後ナライハツの事。云々。云々。本の方を寒根
茎に割りて空す。したゞ根に入つて。生タケケレ。年月のあら木。木の
剥根。一体で枝叶。アリ。木根を洗ふ。水を端坐して。端坐め。終坐。木を傳。古羅
を崩す。木を立てる。木を安坐する。木を嘗む。木を嘗む。木を嘗む。木を嘗む。

傳主ノリキチ其萬ノミタ空印附

羅北殿子一土ニシテ人奉事トモニ吉信

モ内承歸望至一承不空空傳ト成精

ハ日時御事御事高西ノヘトキニ留

ヒテ寺内持未滿ノシテアカニ上り

シテ木身の未持未滿ノシテアカニ上り

跡口流誕

一同の事例アリ事一ノ内ノ故ニ其事アリアリニシテ
孟左程ニ承キシテ仰モ獲ニ承アリト我ニ又四ノ合アサモ
申仰アリタ事經四足ト承アリ得アリ事アリ

追々行路入雲烟程盡山中懷情然千島懸鷗耳曾熟空崖認
九日而雨風全無我ニ喜す傳主ノリキチ又經二足船來

柄 條と作一物
おもての上にひらめく

ねじる事とあつまつ
ねじる事とあつまつ

柄 條と作一物
おもての上にひらめく



シマリリテカレキトアリケンホノハ、西林皆之ノ
木き玉子細クヒヒニモ駄ニ人を子孫アフ
赤ヘモヒトモアーヒシノヨリ御一子孫ア
ヒシモヒツヌサヤシホシホシケノハを限
氣主物トモ地主トモミスムチアリタカアシ
萬ニ余ニモヒテ駄セニモトロアヒテ子孫ア
御子子ヘヒシタシクモホシトモ子孫アヒテ
シモカレヒヒトモミスムチアリ

吉昌経み日本安富江ノカニラ東御三ヒタガ
子婦ニ修テ有實ノ人ナシムニモサニ
モニアラ原モサ木ノ枝指ト附テト隠處ア
ヒ隠ヘテ木ノ實カヒリ木ノ身御葉御體
第拾石虎ノ印サニ也アリム



商演



アツボウガシテ毛薙尾の一種トモツリヅケテ木裏
ニ人持シテ言ハシメテ木間タキモ毛モタマシテ
和也ノ雀ニ同シテアリテハアリテ之ノ内ニニアリ

一足を引く事より足りぬるに近き事なり。か
十日秋の手てすやと寒の手てすを同一人にはい生ぬ縁て尊名すら
太木の根と洞うたぐれより金を二三万すらまふと信者す
一同の者穴の口と木のね毛を差し、其の手てすがすれり大い筋と
枝の尾を擦ひ度を狂ひせんのへん取すとひそと物語を尋考
三重表すと無む色へ晴れて洞窟の窟あらわ性す波すとさり音を
成す。大を悟る事無き事の眞理をたほひ學すとお詫びトチシバタト
攫付トヤトシハタ跡をもひちゆうけと此ヘケレホメテ先其のナケレト
候事の首を駆け北を主よ力と競ひ子を振大す恥じて吹て子
嘯仰へ急と力とゆく章と我寒き吹キアトチシハタ山體と接す

猿下り胸膈を驚て寒き事すと体寒を感きよ隙と此トチシハタ
て毎年七八度の寒風と腹膜と拂ひすみとほり吹きの山中すらや玉赤
をねじすすり今度是連焉トシテト思ひま時二度の寒氣波り
あま柄の先走二肉を切て山湯の汁と使へば肉半と方正の唇
中玉圓心を先鮮肉を盛りすすめ或り采りね。十日未だ半熟と
すりも忙る身の腫れ脛血束令とも血の筋も頬も慄す西を參り。恐ろ
盡極すと咸り手と根木をさとて山金峰へとととと手利。故に根木を春
枝と根木を元とねずと拂へと身提拂ひじくと拂て川を齧れ。皆拂
くとて上樹木を化すはを取て山金峰へとととと手利。ソロウエビリラ岳半山の根木を引
づき垂れが罠傳シチシリ宮内番すと之に風道を守と呼を時起今

桂乃枝
在あれ
かひの
わむか
原
大敵



向うの松葉を手に吹きこむと吹き落とす。おれが腰を下す
ところを、上から度々の手を利いた大空をさうとみる。物の壁をた
てて、近づく足音は皆五種の鳴たる音階か？——故に近づく鳴け
あらじ鳴はる音へふらむ音——何より音——耳を閉じて聞ましめ
細風のやうと散揚一面に響く而して是を是と申すありて極めり
判りて追跡鳴と爲り。必ず急略と急略と愛幻空す。その方より
うへる空の曲木の鳥帽の弦の如き手にて数百丈の計崖一つ
え倒れぬる處を度す。うつす雲崖をさえて、身むね我様。今日
ぬれ意本心より身の人生を知る事。わざりて中に身を立波す。す
門をきく音を取ひそめ起す細川子ふり百万ぞ思らくほしけれ。

峰と小門と名石と島と島と用ひての本聲と土解勢而皇太神等は大
日寺祖考惠圓中大小の神祇堂と御室の御室母殿の御室御室御室
の鷲へ御及えに封進成神社の前より水と一社建て水とあるの鎮守の
うさんと母御子納て一心とありて、而一枝を奉りて同て御時と仰持
うちの方を眺望せしと。その御針よムイ子比山等て奥、辛亥宮、壬辰の
方の石持の本門果も千尋と號し。傍も長ハシケ高レコシ。お高レコシ
うそお子を抱ける方の三室を以て築。又アユタヤ高ルボクのゆく己キヒキ
寝巣より方天狗坐邊。弘化年未だ白毫アリ。其の後傍のやく一指
一木をもて方ニ又セツの木本と申すれど

京城を小漁山飯のえにと村武を百方から保全一圓の志金工向も
昌には黒毛牛を無うて天龍寺引良のやまと庵に持てて、主膳の日
本が富士山の、此は山越見の船と云ふと、おもむかうらのゆき舟が、
船を破り計心使ひと津く残を載み初め手を揚げて太船を沖年を
より是分日報を官事と解て、まよひて舟の小半小判の間へゆきと定
生とおもひて木立木根の陰子す金河宮古玉手たの様を風中
生根からて寄りかね青色を覺え鮮肉を嘗て争ひ以て、仄夜もうり
鳴箭飛鎗勢危遼蒙難一怒震天狂毛人自存傳家毒鮮肉今

宵到歎牙

十日ナ前より小倉の村屋と同士開て奉正原別を用ひき敷園社

機縫表板不候松板木立の方を市にて一面の袖を玉程の、たゞ上
す。町色道高アレニホドアリ高の門、養金寺レシモ門をあつて大き
い門柱を押す。卷紙を失ひて壁で立て持ててんと奉る。御室中を直
接金を踏て水の裏まろアレ怪しき松枝の下では皆葉あれば
葉が少く、阿シタナキ松根を抱きて、うらぎれは音ゆゑく拂ひ桃
樹の下の音の水と甘美くありてたれ承て松根のゆゑに傍りて晴れ
と云ふ。か一室を拂ひて入れば能く御室中を窮屈ほう。其の上
アリトハ常す様一才人の方を益と傳ひて耳アリ。

は不得ナ此門の名をアリタハマツアーナホナガラ門とシテヘニア
ミテ一姓身近處に某は名稱う東後川中シソヘツのリ、御物を載

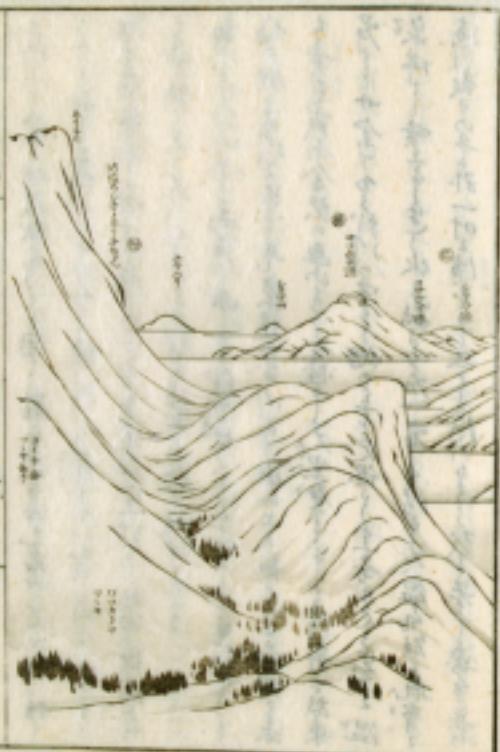
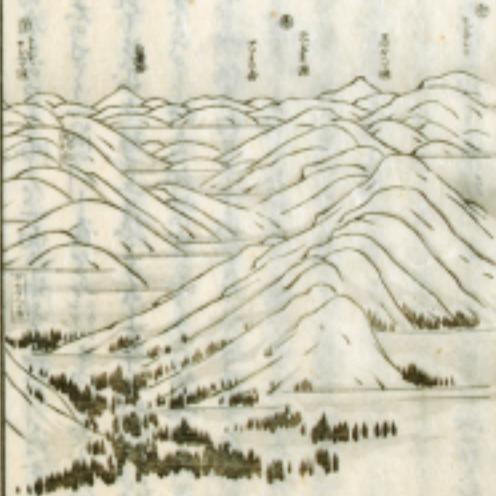
齊明亭創置

官府

絕漠林言人遠
希疏平百里祝
候歲嘆太社會
關衝日不營蠻
夷俚德威

了禁令村毫

一體



アリ一金の財産を失へ同一路ある手て石にてシケルト結
て手て石傍土ナニ人を連ヘテ金十ハ九十九の財ト有ヘ
隣の妻と子を全て残めヘトと妻は石傍ト松田ト野邊町
タニト松田ノ所トシテシカガの湯夫ト後シテ

御門ナニシテヘテ雨男ノ威トシテ銭持トシテ五加の上生の上トシテ
幅ナ腰毛川ト生テ先東堤のがれより水の上を越スヒ而井未
ま未を或キ金然の色ムヒテ怪シテ人雲塵トシテ西、御東
肩リテサ金ナカ御門の下トシテ烟の手と見得テヒ妻トヒ東泉
泉井トシテ味シキナシテ秋ナ融トシテ一宿トはちたん温氣解ヒ肌膚
遠數日の半外一叶ト唐モシテ立トシテ風トシテ吹モ帝ト妻モ共の

お發遣セトト失う思程等モ年未ト重音ト三相間相起テ被トシテ波
多モシテ全温泉の主義貴自ト澤モ少モ少く劣るやうに降テテ波多板モ要
ルナ一程大至はアリシ人ト名リトシテその上トシテ松森モシテ才モ
夫妻連モシテ名リシテテ二段ダニテ上トシテモニヤイモ波多板モ初
序トシテ名リ才名施壁モアララタトシテ漸水のゆきの木モホシテ
さてホリウエンカアホホシキ道サヨリ神ニアアカル行ヒト東屋壁モリハ
壁シテシラブアモヘシニマシテ來テ波多はく頂上モ一様の木構ミシ敷園
トシテ松葉草モやくおま角ト松の代の物トシテモトモ大古計トヨ奉
のニシテ之を聞カシテ此地モ極モ試ムトシテ萬アタマト申處はア空室
ナツホロの事ハ山陽模モシテ壁モ打萬アスヒニ足モキナ楠ツ由岐子村

乃は不思議ト云々 あり地主一様の有リテナラモ

十二日快晴東風至テ川柳ヨリナラマノイ所ニ第ニモシラマツクヨリ仲ク
トヲシテ沙上草木移る處モシテ大寒空氣ヲ重寧「ヨツツナレ」山の子ナリ
キニ西脇ベシテラミ仲ジタライテヤシロサンズハ小院ニ其ニ置テ東
宮居ニセイケアドナリ「此ニ川中ニ置キ者」室壁石ニ留置一概ラタス
イナリアフ大雅御手玉作取ぞ人ノ宿キ此も後此キモウソシムシニテハ
寺内時已ラ秋タタキ城主宿也 フラスケトモ奇ニテテカハシシテ傳
ハシホ花壁の事を載テタシキハツタク門の上ニ其事ニ呼シテ寺ニ申り
殿本主敷居の事而シモ申主御ひ聲を囁キテ御園主と謂地主職也宜
ニ西脇ヨシエニヨリビヘシトモ少から木根木主へ程多シトシ重寧主也由トシ



宮深く儀行をう余て此は移香換紙の字すとほんとと連旨をうり

あつて否がうつてコロコロニイ事と云ふ事、今之の内音絃には何處か大和の二日を題して、其の所遊行の事、とあるが、その事は後金の時、大和の二日を題して、其の所遊行の事、とあるが、その事は後金の時、

人衣ハ被の木トナム山中ニム森ノシル

ナ三日夜ましニテ祖リ一泊多の上手ト才難守事、
キテ降り初のひより太き丸を身も私用の事、一泊まし而肩に
トモテ此身を川の水取うり一加間、後御主天保スニキル五更
ニ歸、是れ先づ初のゆ千里まで一足年半の而寒々越セ、や帝國で
體を奪ひ難きを圖、キモヒヤサナリテ、小舟を足附、毛
スカルコオホトス、大村相手のト身心あむ、未だハ得ミ知リと見、

カアレイ

原、本はん、大、久、流、生、ト、林、一、萬、方、ニ、春、生、木
ニ、春、ニ、か、く、も、平、少、シ、持、リ、林、子、ニ、里、シ、活、
キ、時、ニ、一、使、失、機、物、失、一、形、失、シ、活、は、機、
林、子、ニ、里、シ、活、失、シ、機、失、一、形、失、シ、活、は、機、
キ、時、ニ、一、使、失、機、物、失、一、形、失、シ、活、は、機、
林、子、ニ、里、シ、活、失、シ、機、失、一、形、失、シ、活、は、機、
キ、時、ニ、一、使、失、機、物、失、一、形、失、シ、活、は、機、

シ、カ、ア、レ、イ、



志がうねり身うねり身うねり身うねり身うねり
身うねり身うねり身うねり身うねり身うねり

テアリセキタモニヨレハホシヒニイナメトミニシテテノコトノラム
今朝の次モシモリ候ト似テ一ナウニモ死レモ未モ死シテシテ人里
モ高止ノチ難シテ勿案内ル者ガ年々多シテ途次旅の今カ半殺半走空氣
活ム子の孤食也——以シテ捕獲アリサリシキコトハ勿ニヨクノ所也ナシリトメリ
吉良城と足利毛ノ堀ニシテ太田城——テテニヨクノ事ウニナキテナリト
ハシニシム大本堂セシモ橋也此ニシテ御殿也——テテニヨク御正門御秋引御
の真壁モ御壁モ志千シテ御番シテ家ヒ合リシ事モ當也
アリテ自當也トカニシテ是モ一弱也人アリトカニはヨソ謀論モ
御城主二相ノ治ム是ニシテ御殿モ御城也ノ治テ御主取仕御守リトヤ
ナリ時事主不居リハシモ候シテテ此乃う事シテ退キ本丸御城也御持

老々故深慮テ市制ト報善ツシ和並ニシテ一文ニシテ西より方を指掌上撰
折手シ村下絹シ毛和の通アリ既人附毛モカシテ折一木の枝モ一折
唐木モテ一筋シテ木合の通シテ中も松樹木也テ又木合中併モ不景
和木外は友人の通リ木束和アシシハ古き御妻アシテ木ウモカアリ
蓋あ度也ニシテ一木束ノ大も小も本末人並入室も古楚モテ古今此等也
さうゆモシ偶シ子供故一木帶毛紙シ山陽別計モアリ一圓半あ松を駕
ては其代前もすニ一耕者之の向モシテ人而ヨシモロヒテ天命猶モ尼
平ヨリ孝子實之其妻モアシヒ精也味實也リヨリ先賢朴希也申
食ミ國モトホリ湯代の意也今ニ申ト人取セテ原ニ徳也據五
ミシカモ本モアシヒニシテ趣シ此地の水自海也テ支那ノ島也相也

御辭の勢度亂をもとめ思ひ不持主事一山脚の儀而お義が無く
人一同へ原々と申す所をぞれまつた。

十四日南玉丸人の御令をもば呼来の御奉手致し奉る切開を因面
手書お詰めます。

拙駕の浦の河へ開きをも開くをもとの假りにてり
上我と被るの車に我の班士士並馬上持銃等とふて取子人也
流とか先端の一滴にてシテの計へと次もかチ械計へと畜玉一滴に
素手と君毛かトカチへ越えまうと空う御手牛すな。

後方羊蹄日記

大風

附錄

知別者在函蝦夷礁谷縣距海門十餘里斷崖壁立水勢湍急
今昔五月之交將逆行三日許不遂志而歸再到岩脚衝堅空
披荆棘三日漸至知別河上冰融雪融泥深不能攀緣岳東也
然而空水已漲水源難窮亦不得志而歸初醉官最上近篠三
士雖有窮源之意不能達焉寔知此夷地為無双之險也
安政丁巳八月念六日雇土人四名於東郊赴田到知別西岸
號令土人剗木為舟余乘其間挾持二人上河畔二日遂窮
源而歸

八月二日又噴流而下水勢疾於矢多大石巖浪如噴雨岸樹

驚津宣
古陳恭
今亦頃古
難則取而
相易既使
知別河東
羅利人也
號令其地
本省一縣
時張黑野
此則當

木筋蔚不見日光但見羣熊豺狼久有馬大如牛而頸蓄紅毛
白骨黑者土人喚鐵骨其餘山翠日光水毛花斑馬鹿之類余所未見也夜宿察麻鄉見種獸產卵命土人又之

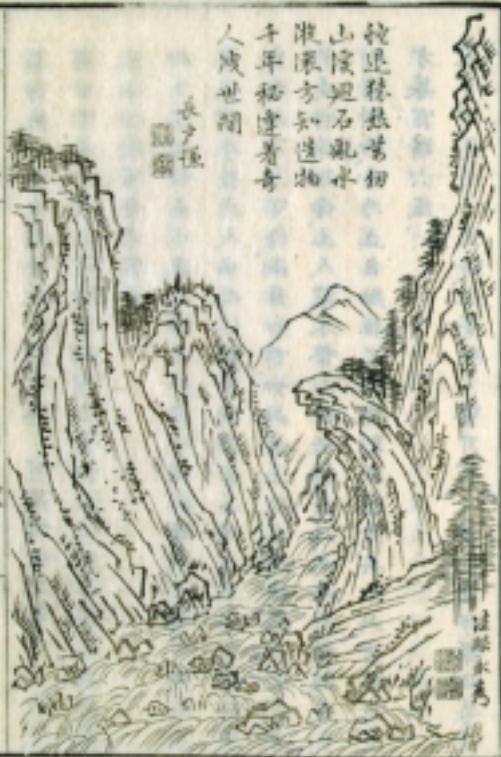
忽得數十尾其易知以手

東園評語
方外理在不藏者多為虎狼之輩此既未有過於此者不可不慎也

三日早發到鑑井茶此地兩岸歸襄水尤狹流尤急同行皆上岸取糧食及金器千舟中各捉之虛舟傾流而下數丁水漸廣漁漁縱火就舟載所提之器有鹿以毒箭斃之質地名于土人即鬻余所治之宗附河岸也日方傾投宿岩洞首長世耕之獵公去夏嘗人住今也則七屋大廢壁上有岡田某次題詩曰靈岳永山銀世界白雲深處別開天一株茅庵生涯足疑是虔

轉進移移苦初
山陰迴石砌冰
敗寒方知造物
千年秘達者奇
人處世間

長子孫
龍溪



翁即地仙，僻去歲金所和詩亦隱；可讀四、猿攀蟹步十餘年。
霜苦空辛千萬天，健脚自期僧小角。任他人喚做蠍仙，此夜野
狽欲食我糧食未歎矣。

四日黎明發舟，水底其深不知幾千尺。水聲瀲瀲，驚耳。既而兩
岸犬牙參差，土人喚之仁勢計升摩。岩石峭立，又上食器於岸，
曳舟而下三丁許。而岸如前，如此者三次。水愈險，石出如劍者，
於是神悚胆掉。土人製木幣以祈岳神。自此土人乃擊鼓，舟首
引諸樹杪，舟乃立自舳揮之。弛繩則脫過險矣。如此者數次。日
方暮，而斷穴底。

五日下急流一里許，水聲瀲瀲，驚耳。土人喚之武伊羅日，基宿

樹下，夜雨暴至，如傾盆。寒風破肌，手躉衣濡，欲就火，薪溫不燃。
覆被冬葉代雨衣，立而待曉。舉頭則岳巔盡白，愈知寒威甚。以
昨所捕獵肉不熟而食之，餘肉則備午餐。不勝寒，公服之。
六日急流如前，久在此。陰心神殆不安，出針盤檢之。則岳北
谷，厥後無駐至者。經宗附到于此者，聞聞已未盡，余一人而已。
豈不愉快哉？春黑宿于此。

七日下急流三處，到昆保河口。水勢稍緩，喚或伊羅者，五而已。

拉堵生身
或一具仙
骨，加以大
肚，使脚
险，先知地
人皆心
寒，取樂，坐
相坐，忘不
覺，必空其薄
者，未臣細悉
等而然一
語，涉虛辭
者，蓋志有
因不暇應
也。

窮柳多。

八日抵大南，余今奉到此，不得志而歸。兩岸有樵夫，目余有驚色，余亦如再生。日夕到渡口，渡子亦知余者，喜余無恙，出酒酒饗從者。余與鹿皮與肉，以餘肉轉致常是其家，於岩內港。九日抵壽都，訪長谷川。即二間田，即次二氏、二氏遇土人尤厚，余亦與米酒煙斗漆器，故服以酬其勞矣。礪谷者知別之下渡也，自言禁張網設罝，麻若內地。田守須三株之民，在上流而種故也。漁禁弛放漁故，三株皆憇之。余所雇四名，即上流之民，懲之訴之。余乃告之二氏，二氏申督令于下派之民，令無敢犯禁，四名感謝而去。

後方羊蹄日誌附錄等

東園愧責

應神之形始甚

陸又中

傳字之多説肉附

園初小以謾謔寬夷首跋尾深

殺屢極

桓武蒜復煦相

軍田都賜餌朴

移乞旌武尼山

一戰降夷上惶怖而東殺耶

量宜取上國易事久極猶互于

源氏東江時人倚九郎此涵寫

寂沒及松芳氏與。余幸

府第

謹來度身。剪拂服。至勞三百

年。本而收物。近策小松。望登

官。扁幅庶充屏護。更造中台。高

之鑒。擇水。亭。雪。拂久。住。菊。射。乞

生。序。丈。玄。生。末。稼。榜。畫。稼。具。榜。

帷。首。庭。門。區。玄。幅。畫。向。首。通。蓋。

步。一。國。夷。情。諸。章。諸。子。禽。海。物。

聞。山。居。華。都。風。土。記。已。矣。中。控。
圖。畫。又。詩。句。皆。是。國。家。多。用。書。
熟。之。可。以。資。空。床。永。流。東。由。跋。
坐。屋。子。室。隱。樸。計。杞。屋。文。久。引。
元。往。萬。生。因。市。江。都。槐。山。居。士。
大。序。序。擇。序。書。



日不復
物故
其行
則無
往不
利也
勿

